

再分析と句包摂からみた『万葉集』と八代集のク語法比較

向井克年

はじめに

ク語法は活用語の連体形に接辞「アク」が接続して名詞句を形成し、「こと」「もの」といった意味を表す。^(主)『万葉集』を中心とした上代語では次例のように多く見出すことができる。

(1) かけまくも〈挂文〉ゆゆしきかも言はまくも〈言久母〉あやに恐き明日香の真神の原に 〔『万葉集』二・一九九〕

しかし、中古以降にク語法は和文資料の中からは殆ど姿を消すことになる。ところで、ク語法と同じように名詞句を形成するものとして準体句と形式名詞「コト」がある。また、現代語では準体助詞「ノ」によるものもある。

(2) a 鳥じもの海に浮き居て沖つ波騒クを聞けば〈騷乎聞者〉あまた悲しも 〔『万葉集』七・一一八七〕
b 見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆること 〔絶事無久〕
なくまたかへり見む 〔『万葉集』一・一三七〕
【コト】

c 〔机の上にある赤い〕のを取つて。 【準体助詞「ノ」】

このうち、ク語法と準体句と形式名詞「コト」は上代という同じ時期に共存していたわけであるが、なぜ同じ機能を表す言語形式が三つも存在していたのか、それらの関係はどのようなものなのかなど未解明な点が多い。しかし、日本語史における名詞句の変遷を考えるうえで上代語の三者共存とその後の消長は重要な論点である。このような、史的変遷という観点からの考察は夙に橋本（一九七八、佐々木（一九九九）、信太（一九九三）などに展開されてきた。しかし、これらの論は『万葉集』を中心とした上代語の中での変遷を想定したもので、上代から中古へという大きな過渡期を捉えたものではない。そこで、本稿は『万葉集』とそれ以降の八代集との比較を通して、衰退したとされるク語法が具体的にはどのように消滅していったのか、また僅かに残存する中古のク語法は『万葉集』におけるク語法と差異があるのか、あるとすればどのような差異か、という観点のもと論を進める。

一 先行研究

ク語法について論じられた前掲の先行研究は主に『万葉集』を対象資料としているが、中古以降の資料として八代集を対象としているものに安達（一九六九）がある。その中でク語法を、①通常の「ク」で終わるもの。②「マク」で終わるもの。③「ナクニ」で終わるもの。という三つの形式に分けて考察している。このうち、②「マク」とは推量の助動詞「ム」が接続したもので次のような例である。

- (3) いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見ま_くほしさにいざ
なはれつづ
- 〔古今集〕一三・六二〇

また、③「ナクニ」は打消しの助動詞「ズ」の連体形「ヌ」+「アク」+助詞「ニ」という構成を持つ次のような例である（以下、それぞれを「ク」、「マク」、「ナクニ」と略称する）。

- (4) 秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに
〔古今集〕四・二二八

これらの用例は八代集においては次のように分布している。併せて『万葉集』の用例数も示す。

そして、「ク」「マク」「ナクニ」のそれぞれについて安達（一九六九）で述べられた結論を私にまとめると次のようになる。

- ①通常の「ク」は、多くが古体を残したものや、「願はく」や「老いらく」のように慣用的に熟したものである。それらはやがて

形式名詞「コト」に取って代わられる。

- ②「マク」は、八代集初期には「欲シ」が同一文中にほぼ現れ、後にそれらが熟して「マホシ」という助動詞を誕生させる。

- ③「ナクニ」は、詠嘆用法と逆接用法があるが、逆接用法が主流になるに至り、逆接の接続助詞「ネド」+終助詞「モ」などの表現と競合し「ナクニ」は衰退する。

表 1

総計	ナクニ	マク	ク	
531	155	130	246	万葉集
51	39	6	6	古今集
46	38	4	4	後撰集
26	17	6	3	拾遺集
4	3	1	0	後拾遺集
0	0	0	0	金葉集
2	0	1	1	詞花集
7	7	0	0	千載集
15	5	6	4	新古今集
151	109	24	18	八代集総計

右の考察は、ク語法が中古以降において固定化した言い方として残るか、他の形式に取って代われ消滅するかという展開を描いたもので、大部分において首肯される。これに、『万葉集』を比較・検討することで改めて上代から中古以降のク語法の展開を素描したい。なお、八代集の中にはその歌集の当代歌人の作ではない例も含まれている。しかし、作歌した人物が当代の者でないとしてもその歌集に所収されるということは、その歌集を編纂した時代におけるク語法への一定の理解がそこに働いていたためと考えられる。従って、各時代の言語認識の一つの実態として捉えてよいと思う。ゆえに、作歌した歌人の時代の別は措くことにする。

二 ①通常の「ク」で終わるもの

表1にあるように、八代集におけるク語法の総計は一五一例確認される。そのうち「ク」は一八例と全体の割ほどである。一方、『万葉集』ではク語法全体が五三一例あるのに対し、「ク」は二四六例と半数以上の比率となっている。結論を先に言えば、このような『万葉集』から八代集への分布の異なりは「ク」そのものの生産性の衰退を意味しており、ク語法は「マク」や「ナクニ」といった特定の形式での造語力に依拠したかたちでしか残存できなかったと言える。以下、八代集における「ク」について詳述する。

(5) a まめなれど何ぞはよく刈萱の乱れてあれどあしけくもなし
〔古今集〕一九・一〇五二

b 君があたり雲井に見つ、宮路山うち越えゆかん道も知らなく
〔後撰集〕一三・九一八

c 潮満てば入ぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き
〔拾遺集〕一五・九六七

d 浅茅生にけさをく露の寒けくにかれにし人のなぞやこひしき
〔詞花集〕八・二六四

(6) a 中にを寝むと愛しくしが語らへばいつしかも人となり出でて悪しけくも良けくも見むと
〔安志家口毛与家父母見武登〕
〔万葉集〕五・九〇四

b 山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく
〔道之白鳴〕
〔万葉集〕二・一五八

c 潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き
〔見良久少戀良久乃太寸〕〔万葉集〕七・三三九四
d み吉野の山のあらしの寒けくはたや今夜も
〔為當也今夜毛〕我がひとり寝む
〔万葉集〕一・七四

(5) は(6)にあるように既に『万葉集』に類歌あるいは類型的な表現を持つものである。つまり、これらは万葉歌を規範としながら成立した表現であると言える。述べたように、八代集以降のク語法は多くが「マク」や「ナクニ」という形式に支えられることで残存するが、そうでない場合は右のように万葉歌との類型性に支えられることで残存している。

(7) a 老いらくの来むと知りせば門鎖してなしとこたへてあはざらましを
〔古今集〕一七・八九五

b あしびきの山田もる庵にをくか火の下こがれつ、わが恋ふらくは
〔新古今集〕一一・九九二

c 世の中の憂けくに飽きぬ奥山の木に葉に降れる雪や消なまし
〔古今集〕一八・九五四

d ねがはくはしばし闇路にやすらひてか、げやせまし法の灯火
〔新古今集〕二〇・一九三二

(7) は類型的な表現を『万葉集』に持たない。ただし、それに加えて、いずれも述語としての用法を持たないという点が注目される。そもそも、ク語法は活用語を名詞化する接辞であるが、『万葉集』では次のように述語として機能する例が確認される。

(8) み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく
〔加欲波久〕
〔万葉集〕二・一一三

要するに(7)は用言としての使用は認められず、全て体言としての使用のみとなっているのである。八代集以降において、ク語法が述語として使用されるのは主に「ナクニ」である。ただし、次の例は「ク」に含めたものだが、これも述語として使用されている。

(9) 一人寝る人の聞かくに神な月にはかにも降る初時雨哉
〔後撰集〕八・四四七

まとめると八代集においてク語法が述語として使用されるのは助詞「ニ」が後接する場合か(5) a bのような『万葉集』に類型表現を持つ場合のみである。助詞「ニ」の後接については後述する。

以上、八代集の「ク」は『万葉集』に類型的な表現があることで残存を許されている場合か、完全に体言としての使用に限って残存している場合かの二つがある(ただし、(9)は助詞「ニ」の後接によって別扱いとする)。このうち、体言としての使用に限られるものは安達(一九六九)によれば、形式名詞「コト」との競合によって姿を消したとされている。

ところで、このうち「願はく」は『万葉集』にはなく和歌の中の語としては『新古今集』が初出である。しかし、漢文脈の上では上代から既に見られ、現代語に至るまで使用されている。つまり、「願はく」は文体による位相が想定されるが、『新古今集』の当該歌は仏教に関する歌であり、そうした背景から和歌での使用が許

容されるようになったものと思われる。同様に、「老いらく」も現代語において使用されている。

このように、文体的な位相を帯びながらも「願はく」「老いらく」などは現代語にも残存しており、消滅したはずのク語法が特定の語形に限り現代語にまで残存している事実をどのように考えるべきだろうか。注目されるのは、現代語における「願はく」や「老いらく」の使用を見た時、体言としての使用に限られており上代語に見られる他のク語法のような連用成分としての用法はないという点である。これをク語法の完全な体言化と仮称する。完全な体言化とは、本来のク語法の構造である「活用語+接辞「アク」という分析意識ではなく、「願はく」「老いらく」がそれぞれ一つの語彙として再認識され定着したというものである。他にも、ク語法が完全に体言化したものとしては「思惑」などが挙げられる。これは、「思はく」に新たに表記が与えられ、接辞「ク」としての要素は完全に消滅していると言える。

三 ② 「マク」で終わるもの

八代集にけるク語法一五一例のうち、「マク」は二四例確認できる。これら推量の助動詞「ム」に接辞「アク」が接続した「マク」はさらに三つの類型に分類できる。

- (10) a いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにい
ざなはれつつ
〔古今集〕一三・六二〇
b いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも
惜し
〔古今集〕一八・九八一

c 宮人とその数なぬ身をなして思ひし事はかけまくもかし
こけれども頼もしき・・
〔拾遺集〕九・五七四

(10) a は基本的には逢瀬を望む願望表現であり、八代集では二三例確認される。これは、「見ル」+「ム」+「阿克」に加え、「欲ル・欲シ」が共起した形式である。このような形式は『万葉集』においては四四例と広く見られる用法である。そして、ク語法と「欲ル・欲シ」がやがて一語化して「マホシ」という助動詞を誕生させる。また、これらはク語法に接続する活用語が必ず「見ル」となり例外がない。

(10) b は活用語+「ム」+「阿克」を主語として、その述語が「惜シ」となったものであり、八代集では一〇例確認される。ク語法部分の活用語には「立ツ」が四例の他、「荒ル・置ク・足沾フ・踏ム・散ル・明ク」が各一例ずつ確認される。『万葉集』においてもク語法を主語として述語が「惜シ」となる例が四五例確認される。

(10) c は右の分類のどちらにも属さない孤例である。当該歌は儀礼的な長歌であり、そういった歌そのものの特殊性がこういった孤例を生んだと思われる。ただし、「掛けまく」という形式自体は『万葉集』には一三例あり、決して珍しい表現ではない。よって、これも(5)のように『万葉集』を一つの規範として成立した表現であると言える。このことと、当該歌が長歌であることは関連する。なぜなら、八代集の長歌の多くは儀礼的な歌が多いが、そしてその儀礼性とは古歌、つまり、『万葉集』を規範に仰ぐ傾向にあるからである。当該歌がやや例外的であるのは、八代集ではその長歌が少ないからである。

さて、右のうち(10) c を例外として措くとして、少なくとも八

代集の「マク」に関しては「欲ル・欲シ」が共起する場合か、「惜シ」が共起する場合かの二つの類型しかないことになる。一方、『万葉集』にける「マク」は右以外にも多様な形式がある。にも拘わらず、なぜこの二形式に収斂していったのだろうか。注目されるのは助動詞「ム」の存在である。『万葉集』における「マク」は一三〇例確認される。これはど多くの「ム」がク語法に接続するのは、ク語法と「ム」に意味的な親和性があるためと考えられるが、これを向井(二〇〇八)では「可能世界」という概念で説明している。ここでは詳細は割愛するが、要するに、ク語法の持つ意味と助動詞「ム」の持つ意味には重なるところがあり、その共通性ゆえに両者が接続した「マク」という形式は『万葉集』においては頻繁に生成されやすい形式であったと言える。そして、その中で「欲ル・欲シ」「惜シ」が共起する例は右に述べたように前者四四例、後者四五例の合計八九例と「マク」の中でもさらに主要な形式なのである。つまり、八代集に残存する「マク」は、もともと「マク」自体が『万葉集』において主要な形式であったことに加え、その「マク」中でもさらに主要な形式のみが残存しているのであり、これもまた(5)と同様、類型性に支えられた表現と見做すこともできる。

四 ③「ナクニ」で終わるもの

八代集にけるク語法一五一例のうち、「ナクニ」は一〇九例と三類型の中では最も多い。『万葉集』においても一五五例と、「マク」以上に多く見られる形式である。この形式は安達(一九六九)で触れられているように、逆接と詠嘆の二用法がある。

(11) a 山吹はあやな咲きそ花見むと植あけむ君がこよひ来なくに
【逆接】(『古今集』二・一二三)

b 桜花色はひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに
【詠嘆】(『後撰集』二・五一)

(11) a は「〜ないのに」と解釈されるような例で、二句目で一旦文が終わっている。そして、三句目からまた文が始まっている。このように一首が二つの文からなる「ナクニ」は逆接を表す。一方、(11) b は「〜ないことよ」と解釈されるような例で、従属節を伴うものの一首で一つの文をなしている。このような「ナクニ」は詠嘆を表す。右の意味分類は富士谷成章(一七七八)をはじめ、木下(一九七二)などでも整理されている。

さて、八代集におけるク語法の用例数を全体的に眺めると、初期の『古今集』『後撰集』『拾遺集』までの三代集において集中的に使用が見られ、『後拾遺集』以降は僅少になり、一切用例が確認されない『金葉集』を間に挟みながら、最後の『新古今集』で僅かな増加を確認できる。周知のように『新古今集』は和歌文学の復古・復権を志向した歌集であるから、古体であるところのク語法の使用にはそういった和歌文学史観上の意図も感じさせる。しかし、そうは言っても、三代集ほどの使用数までは至っておらず、それはすなわち、ク語法の実質的な使用は三代集までに淘汰されており、ク語法そのものが既に理解不能な語句として認識されていたことを意味する。例えば、次の俊成の発言は八代集当時の歌人のク語法に対する所感として示唆的である。

(12) みつしほにかくれぬ磯の松の葉もみらく少なく霞むはる哉
定家

判者申云。みらくなといへる詞。わろき事なれと。宜も聞えねと。すゑとをきといへるにまさるへくや。

(新宮撰歌合 三番 羣書類従第十二輯)

ところで、「ナクニ」の歌集ごとの用例数を見るに、三代集までに合計で九四例ある。つまり、八代集における「ナクニ」の用例は九割近くが三代集に限られている。ところが、『後拾遺集』以降は用例数が激減している。このような用例数の大幅な変動は「ク」「マク」には見られない。つまり、八代集のク語法とは「ナクニ」が主体であり、「ナクニ」の衰退がすなわちク語法の衰退と同義であったと言える。

しかし、そのように捉えたとき、「ナクニ」が中心である八代集のク語法一五一例と、それ以前の『万葉集』のク語法五三一例は等価なのだろうか。この点に関して次節で述べたい。

五 考察

五・一 前接語と主要語

この節では『万葉集』と八代集のク語法が等価か否かを考えたいが、その議論に先立ち用語の整理をする。

(13) a 桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに
【古今集】七・三四九

b 渡守はや舟隠せ一年に二度来ます君ならなくに

〔拾遺集〕一七・一〇八五

c 花薄穂に出でやすき草なれば身にならむとはたのまれなくに
〔後撰集〕七・三五四

(13) a の傍線部は動詞「老ユ」+接辞「アク」でク語法を形成している。この時、「老ユ」を第一前接語と呼び、このク語法句の主要語は「老ユ」である。(13) b の傍線部は助動詞「ナリ」+助動詞「ズ」+接辞「アク」でク語法を形成している。この時、「ズ」は第一前接語で「ナリ」は第二前接語と呼び、このク語法句の主要語は繫辞ともなっている「ナリ」である。(13) c の傍線部は動詞「頼ム」+助動詞「ル」+助動詞「ズ」+接辞「アク」でク語法を形成している。この時、「ズ」は第一前接語で「ル」は第二前接語で「頼ム」は第三前接語と呼び、このク語法句の主要語は「頼ム」である。このように、活用語を接辞「アク」に近い順に序し、そのク語法句の述語部分の中心的な意味の部分为主要語と呼ぶことにする。

五・二 再分析と句包摂

接辞「アク」の前接部分には活用語であればどのような語彙でも接続し得るが、実際には接続する活用語の種類には一定の偏りがある。それは、ク語法が単なる名詞化接辞ではなく、意味論的な意味を担っているからであると考えられる(向井(二〇〇八))。ただし、『万葉集』と八代集を比較した時、『万葉集』の方が接続する活用語の種類自由度は高い。これはク語法の第一前接語の異なり数の変化から窺える。次の表は第一前接語が助動詞である場合、どのよう

な助動詞が接続するかを見たものである。

表2は『万葉集』の場合である。『万葉集』では「ズ」

表2 『万葉集』

191	ズ
128	ム
12	キ
5	リ
2	ケリ
2	ケム
2	ツ
2	ヌ
1	ス
345	総計

表3 八代集

110	ズ
24	ム
134	総計

「ム」が圧倒的に多いが、「キ」以下七種の助動詞が接続する例も確認できる。ところが、八代集になると表3にあるように「ズ」「ム」以外の助動詞が第一前接語になることはなくなる。八代集では一部の古体としての使用である「ク」を例外として、ク語法は「マク」か「ナクニ」という形式でしか残存しない。つまり、『万葉集』から八代集にかけての前接する助動詞類は激減しているのである。では、なぜ残存したのが「ズ」「ム」の二つに限られるのかというと、もともとこの二つが『万葉集』における主要な前接助動詞であり、その量的頻度からやがて『万葉集』の典型として捉えられるようになってからではないだろうか。つまり、八代集の「マク」も「ナクニ」もまた『万葉集』を一つの規範とした意識が作用していたと考えられる。

また、主要語について眺めると、『万葉集』では次の語彙が主要語としてク語法で使用されている。

(14) イ寝 イ寝カツ サ寝 サ鳴ル 逢フ 慰ム 為 隠ル
越ユ 過ギカツ 過グ 会フ 解ク 開ク 隔タル 刈ル
巻ク 堪フ 干ル 緩ス 帰ス 祈ム 及ケリ 居リ 経
懸ク 見ス 見ユ 見ル 遣フ 言ヒ継グ 言フ 呼ブ
枯ル 語ル 乞フ 更ク 荒ル 行ク 降ル 合フ 告グ

告ゲ遣ル 告ル 咲ク 散ル 思ハフ 思ヒ 暮ス 思フ
 思ホユ 止ム 死ヌ 賜ブ 飼フ 偲フ 取ル 守ル 拾
 フ 終フ 植ウ 寝 申ス 尽クス 吹ク 遂グ 絶ユ
 染ム 争フ 増サル 待ツ 嘆ク 知ル 置ク 通フ 入
 ル 忍フ 濡ラス 繁ク 付ク 敷ク 伏セリ 聞ク 並
 ブ 別ル 編ム 暮ル 飽ク 忘ル 明カス 明ク 鳴ク
 間フ 有リ 来 落ツ 立ツ 恋イ居リ恋フ 老ユ 翳ス

【動詞】
 悪シ 安シ 暗シ 遠シ 寒シ 嬉シ 久シ 嫉シ 暑シ
 辛シ 清シ 静シ 惜シ 楚ナシ 著シ 長シ 痛シ 繁
 シ 悲シ 無シ 憂シ 欲シ 良シ 恋シ 【形容詞】
 ナリ 【助動詞】

一方、八代集では次の通りである。

(15) 慰ム 解ク 掛ク 堪フ 経 見ユ 見ル 言フ 枯ル
 荒ル 降ル 告グ 咲ク 散ル 思フ 思ホユ 消ユ 寝
 吹ク 知ル 置ク 聞ク 飽ク 忘ル 明ク 有リ 来
 立ツ 恋フ 老ユ 願フ 足沾フ 住ム 消 触ル 尽ク
 貸ス 踏ム 背ク 分ク 頼ム 留マル 【動詞】
 惜シ 憂シ 良シ 悪シ 寒シ 浅シ 【形容詞】
 ナリ 【助動詞】

このうち、太字で示した語彙は『万葉集』ではク語法として使われておらず、八代集において新たにク語法として使われたものであ

る。この中で「願フ」以外は全て、「マク」か「ナクニ」で使用されている。つまり、造語力という点で「ク」にはその力はやなく、「マク」と「ナクニ」においてのみ新たな語形が生み出されているのである。このことから、「活用語＋接辞アク」という認識よりも、「活用語＋マク／ナクニ」という語構成のものとして再分析されていたのではないだろうか。そして、「ク」に関しては、二節で述べたように、万葉歌と類同する文脈の中での使用か、完全な体言としての使用かの二つであった。これはつまり、「ク」そのものが新たな語彙と結びついて語を生産したと言うより、一つのク語法句がそのまま一つの語彙として認識されていたのではないだろうか。すなわち、「活用語＋接辞アク」ではなく、「ク」のように再分析されていたと言える。

このように、「アク」という接辞によって（意味的な制限はあるものの）様々な活用語を接続させることで名詞句を形成する『万葉集』のク語法と、「マク」「ナクニ」を一つの単位とすることでしか新たな語形を形成できない八代集のク語法は既に等価とは言えない。ところで、「ナクニ」で注目されるのが、いずれも述語として使用されている点である。『万葉集』では「ナクニ」以外の形式でも述語用法は存在するが、八代集における述語用法は「ナクニ」と(5)abd、(9)のみである。このうち、(5)dと(9)は助詞「ニ」を後接するという点で「ナクニ」と共通する。つまり、八代集において述語用法を持つク語法は一一三例あり、そのうち一一一例が助詞「ニ」を後接しているのである。この助詞「ニ」の後接で想起されるのが句包摂という現象である。句包摂とは接尾辞「サ」や形式名詞「サマ」などに助詞「ニ」が後接して連用句を形成するもので

ある。例えば、「サ」は形容詞語幹に後接して「楽シサ」「嬉シサ」といったように名詞を形成する。ところが、青木（二〇一〇）では次のような例が報告されている。

- (16) 「身ヲ正直ニモチタ」サニ此カサヲキルゾ

〔蒙求抄〕五・二一ウ

「モチタサ」は名詞であるため、本来は連体修飾を受けるはずだが、(16)では連用修飾を受けている。つまり、形容詞語幹＋「サ」が用言性を發揮し「」で示したような用言句を形成しているのである。他にも「サマ」や「氣」などの形式名詞に「ナリ」が後接した場合にも同様の現象が起きるとし、これについて次のように述べる。

- (17) これは、「ナリ」または「ニ」を伴うことにより、形容詞または接続助詞という、ある種の連用成分が形成されることになるためではないかと考えられる。ここにおいて、動詞連用形や形容詞語幹といった形式が、再び用言性を發揮することが可能となるのであろう。このようにして、合成語の前部分の用言の項構造に従って「句」が形成されたものが、これらの「句の包摂」現象であると考えられる。

（青木（二〇一〇）二二三頁）

ここで示された「ニ」の後接による句の包摂は古典語から現代語に至るまで日本語に普遍的に見られる現象であるが、このような語から句への拡張は後接要素の影響によって全体の文成分の性格が決

定される現象であると言える。それを青木（二〇一〇）は「右側主要部の規則」が働いているためであるという。「右側主要部の規則」は日本語の構造を考えるうえで広く援用される概念である。

そして、これはク語法の消長を考えるうえでも重要な意味を持つ。八代集においては「ク」が古体としてのみ残存し、「マク」が特定文脈の中で残りながら、やがて「マホシ」として変遷していく中であって、「ナクニ」だけがなおも多く残存している。それは、「ニ」の後接によってク語法が接続用法という新たな用法を確立したためと考えられる。つまり、「ニ」が後接することによって、連用句を形成することができる新たな語単位を獲得し卓越化した形式が「ナクニ」であったと考えられる。ただし、『万葉集』にも「ニ」を後接して接続を表す「ナクニ」は確認される。しかし、それらはク語法全体の一部であり、あくまでも「活用語＋「ズ」＋「アク」と分析されるような構造だった。それは他のク語法と同じように「活用語＋「アク」という構造と等価なものであった。にも拘わらず、ク語法の中で唯一「ナクニ」という形式だけが多くの八代集に残存したのは、助動詞「ズ」が意味的にク語法に前接し易いという点に加え、「ニ」の後接による再分析とその結果起きた句包摂という日本語に普遍的に内在する原理に支えられていたためである。

おわりに

本稿ではク語法が上代語から中古語にかけて衰退していく中で、なおも八代集に残存するク語法と『万葉集』のク語法との差異を確認することで、その変遷の背景を探ろうとした。その中でク語法を

「ク」「マク」「ナクニ」の三つの形式に分けて考察した。

まず、「ク」は『万葉集』を規範とする文脈の中で使用されるか、完全に体言としての使用かであった。ここで、『万葉集』を規範にすると言ったとき、それはもはや「ク」そのものの意味は当代の歌人には理解不能な語句であったと言えるのではないか。ゆえに、歌の文脈の支え無しには活用できなかったのであり、名詞としての使用にしても「ク」を分析的に認識できないということは「ク」の接辞要素としての働きは既に尽きていたと言える。また、「マク」は「欲シ／欲ル」「惜シ」といった語が共起する特定の文脈の中でしか使用されず、やがて「マホシ」へと変遷していく。つまり、この「マク」にしても「ク」と同様に接辞としての認識は既になく、あとは共起する語との音韻的融合を待つのみであった。そして、最も多く残存した「ナクニ」であるが、それもまた右と同様に接辞としての分析的な認識は既に消滅していたと言える。ところが、「ナクニ」の場合は「ニ」の後接という要素が働いて新たな用法として定着していたと考えられる。しかし、結局は「ナクニ」もまた和文脈の中から消滅していくのだが、それが具体的にどのような理由によるのかは稿を改めて述べる。

以上、『万葉集』と八代集のク語法の比較を通して、両者が少なくとも接辞要素としては等価ではないことを確かめた。とは言え、八代集の歌人たちが万葉歌を規範として、あるいは典型としてク語法を使用していたことは大部分において認められてよい。そうであるならば、その受容がどのようなものであり、その結果生成された八代集の歌々がどのような意味を持つものなのかを知るうえで、また、日本語の名詞句構造の解明という点でもク語法を支点とした『万葉

集』と八代集の比較には大きな意義がある。

注

- (1) まず、ク語法が「く」と「らく」の二種に分かたれると説いたのが安藤（一九三五）、佐伯（一九五五）であったが、ここで問題となったのは、なぜこの二語形が存在するのかという点である。その中で、大野（一九五二）は連体形接続説を提唱し、「く」「らく」の二語形あることの問題を活用語連体形に接続した「*aku*」という形式を想定することで解決しようとした。すなわち、この「*aku*」が連体形活用語尾と母音融合することで「く」や「らく」のような語形が生成されたと説き、これが現在の定説となっている。本稿では大野説に従う。

使用テキスト

- 井手至 毛利正守（二〇〇八）『新校注万葉集』和泉書院
田中裕 他（一九八九—一九九二）『古今和歌集』新古今和歌集『新日本古典文学大系』岩波書店
中田祝夫（一九七七）『富士谷成章著 あゆみ抄』勉誠社

参考文献

- 青木博史（二〇一〇）『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房
安達隆一（一九六九）『和歌表現における「ク語法」の消長——八代集を資料として——』『愛知教育大学国語国文学報』二二

安藤正次（一九三五）『都良久』『去良久』などについての考』『古典と

古語

大野晋（一九五二）「古文を教える国語教師の対話——文法史の知識はどの

やうに役立つか——」『国語学』八

木下正俊（一九七二）『「なくに」覚書』『万葉集研究』一

佐伯梅友（一九五〇）『奈良時代の国語』三省堂

佐伯梅友（一九五五）「動詞・形容詞」『万葉集大成六言語篇』

佐々木隆（一九九九）「ク語法をふくむ構文」『萬葉集と上代語』ひつじ書房

信太知子（一九九三）『万葉集』における連体形準体法とク語法——句構

造の観点から』『日本語学論集 小松英雄博士退官記念』三省堂

橋本四郎（一九七八）「ク語法とその周辺」『論集日本文学・日本語一上代』

角川書店

向井克年（二〇一八）「ク語法が対象化する事態の様相——ク語法が「思フ」

「見ル」の目的格になる場合——」『萬葉』二二六